

レポート

7th European Symposium on Thermal Analysis and Calorimetry (ESTAC 7) に参加して

第7回European Symposium on Thermal Analysis and Calorimetry (ESTAC 7) が、1998年8月30日から9月4日までの6日間、Hungaryのリゾート地Balatonfüredで開催された。シンポジウムは宿泊も兼ねHotel FüredとHotel Marinaで行われた。これらのHotelはBalaton湖と庭続きになっていて、泳いだり、ボートに乗ったりするシンポジウム参加者の姿も見られた。Balatonfüredからバスで20分程行くと、映画のロケがよく行われるバロック風の教会のあるTihanyがあり、少し時間をかけると、手作りの磁器で有名なHerendや、非対称の城が有名なKeszthelyへ行くことができる。

ハンガリーは、故Erdey教授らの尽力により1969年にJournal of Thermal Analysisが発刊されたことに見られるように、熱分析のメッカであるせいか、ハンガリーからの参加者は50名を超え、組織委員会委員長のLiptay教授を始め、ハンガリー化学会のメンバー中心の惜しみない尽力によりシンポジウムは成功裏に運営された。Europeanと冠していても、アメリカ合衆国、日本、中国、インド、トルコ等のアジア・中近東、アルジェリア、南アフリカ等のアフリカ、ブラジル、オーストラリアからと世界中からの参加があった。参加者名簿から数え出した全参加者は合計361名で、日本人は日本からの10名にドイツ在留の1名を加えて計11名であった。前回 (ESTAC 6) についての北岡さんの報告では、参加者は約450名とあるので、今回は100名弱の減で、ヨーロッパも不況であることの現われであると妙に納得している次第である。

シンポジウムは、8月30日夕刻のNetzsch Gerätebau GmbH招待のWelcome Party、8月31日朝の開会式に始まり、9月4日昼前開会式で終了した。開会式は、ESTAC 7の組織委員長であるLiptay教授の挨拶のあと、ハンガリー化学会の会長、ESTAC会長、ICTAC会長、ヨーロッパ化学会会長の挨拶、Balatonfüred市長の挨拶の後、Paulik教授への「Journal of Thermal Analysis and Calorimetry Paulik教授75歳誕生日記念号」の贈呈および花束贈呈、最後にGardonyi Zoltan室内楽団の演奏で幕を閉じるという割と大袈裟なものであった。開会式は、組織委員の労をねぎらい、次回 (ESTAC 8) の開催計画を発表するという割と

簡素なものであった。ESTAC 8は2002年スペインのバルセロナでの開催が予定されている。組織委員長はInsitut Quimic de Sarria, URLのRosa Nomen教授 (E-mail: rnome@iqs.url.es) と決まった。

プログラムは、5件のplenary (40分)、3件のinvited (30分)、10件のkey (30分)、2件のaward (30分)、114件のoral (20分)、そして284件のposter発表で編成されていた。Hotel Füredの2階の360名程収容できる大会場と廊下を挟んだ向かい側の隣接した150名程収容できる二つの小会場が講演会場に当てられた。皆が聞けるように、plenary, invited, および、award発表の講演時間帯には、他の会場での発表は組まれていなかった。他の講演は3会場で同じ時間帯に並列に分野別に組まれていた。Hotel Marinaの大食堂の2階のテラスがposter発表の会場で、分野別に3日に1回合計3回の発表が組まれていた。発表のときは、全講演はブレイクタイムでposter発表に参加することができるようになっていた。このように、プログラム上は、スムーズに、合理的に進行するはずであった。私は成功裏に運営されたと前述したが、それはヨーロッパのthermal analyst達にとってであって、私を含めた日本人にとって、時間にルーズな運営は驚愕するところのものであった。講演時間を



写真-1 開会式で挨拶している司会のPokol教授とLiptay教授



写真-2 日本からの参加者と同伴者：Hotel Füredの入口の前で

延長して悪びれず講演する発表者、それを注意もしない座長、講演者がいないといって20分の講演時間を超えて40分程探し回って、次の講演を遅らせる座長。講演が伸びているのに、20分間のコーヒーブレイクだけは、しっかりとる人々。いくらプログラムが合理的に組まれていても、時間が守られないと混乱することを認識していない運営であった。この点を除けば運営は成功裏に行われたと思う。

発表分野は、合同開催したEurosolidシンポジウムと品質保証に関するワークショップを除いて、次の7分野に分けられていた。

1. 無機化学と材料科学 (25)
2. 有機物質と医薬品 (9)
3. 食品と生命科学 (4)
4. 高分子 (22)
5. 環境 (4)
6. 地球科学 (4)
7. 理論, 反応速度論, および装置 (32)。

カッコ内の数字はoral発表の発表件数である。無機物質と高分子物質に関する発表が多いのは12th ICTACと同様である。また、装置も含めた測定法に関する発表が多いの

も12th ICTACと同様である。内容は、多岐に渡っているのですがとても紹介しきれないが、高分子の分野に限って言えば、相変わらずというか、やはりと言うか、最終日にはプログラムにないUniversität UlmのSchawe教授の講演が飛び込みで入ったりして、温度変調DSCに関する発表に関心が集まった。Schawe教授の講演は、PETの結晶性と変調周波数の関係に関するものであった。工業的に、ナイロンやPETの成形工程での結晶化に関する情報はかなり重要であるらしく熱処理条件をいろいろ変えたサンプルのDSCや温度変調DSC測定を行い議論している発表がかなりあった。また温度変調DMAに関する発表もあった。ヨーロッパの、多分世界の熱分析の研究の傾向は、工業における問題解決のために熱分析を用いる方向にあるように感じる。TMG-RSC賞を受賞されたOxford大学の若き研究者Allen博士の研究は、フォイルとか、プレートとかに成形するとき問題になるアルミニウムに含まれるわずかな不純物による相変化の状態を添加物分散技術とDSC測定を組み合わせる方法により調べたものであった。

ESTACとは何かということを見ると、4年ごとに開かれるICTACの2年後、4年ごとに開かれるESTACは、ちょうど冬季五輪のような時期に開かれるが、内容はICTACとそれ程変わらないmeetingであると考えられる。研究成果を世界に発信するのに4年の周期は長すぎるものの回答なのかもしれない。Balatonfüredの5日間は、私にいろいろな経験をさせてくれた。今回のESTAC 7参加は、Balaton湖に纏わる伝説とともに私にはいい思い出を残してくれた。

本稿を終わるに当たり、貴重な情報とopening ceremonyでの写真を提供して下さったTechnical University of BudapestのPokol教授に感謝の意を捧げます。また、ESTAC 7で公私にわたりお世話になった日本からの参加者の皆さんに感謝いたします。

(防衛大学校 化学教室 小島敬和)